

19 節. 「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。」

主イエスが復活された「週の初めの日」、マグダラのマリアが「わたしは主を見ました」と告げ、更に「主から言われたこと」を告げたにもかかわらず、弟子たちはその事実を確認することもなく、その日の「夕方」となってしまった。そして弟子たちは「ユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけて」閉じこもっていた。

ヨハネによる福音書では「ユダヤ人を恐れた」という場合、多くの、ユダヤ当局、ユダヤ教の宗教指導者たちを恐れたということ（7:13、9:22、19:38）。

「『ユダヤ人』とは「この世」の代表者である。」（伊吹）

「『畏れ、恐れ』(φόβος、ポボス)とは本来、神に対する人間の姿勢を表す。人間の力に対する根源的なあり方である。それはすなわち神顕現に対するものである(6:19、マルコ 4:41、ルカ 7:16 その他多数)。ここではそれが倒錯している。まず国家権力への恐れ、迫害への恐れ、死への恐れ、神が自分に与えたもの、本来感謝をもって受けるべきものに対する世間体への恐れ、ここでは基本的には頹廢したこの世の自分に対する予断、偏見、無能力への恐れ、ドクサ(栄光)を失うことへの恐れなど数えあげればきりが無い。

ここで「恐れる」という動詞ももちろん勘定に入れる。これは人間の基本的実存形態に属す。真正のキリスト者にとっては原則として自己に誇ることを除いて恐れるべきものは何もない。もし人間がこの世のドクサから生きていれば、これを失うことが「恐れる」ことの基本である。死は恐れるべき敵であり、墮落した人間は、それを恐れないことにおいて誇る。または怖れに対し人間は、関心をこの世での他のものへ転じる。一々数え上げる必要もないであろう。関心をよそへ向けることが最後のよりどころとなる。イエスはこれを最後のものとするを完全に奪った。(新しく与えるためには一度すべてを取らねばならないからである:ホセア6:1-2「さあ、わたしたちは主に帰ろう。主はわたしたちをかく裂かれたが、またいやし、わたしたちを打たれたが、また包んでくださるからだ。主は二日の後にわたしたちを生きし、三日目にわたしたちを立たせられる」)。世への完全な己の引き渡しや没落に打ち克つことについて述べられねばならない。それが復活である。」（伊吹）

弟子たちは、自分たちのいる「家の戸に鍵をかけていた」。そこに復活の主イエスが現れる。「この戸が閉じてあったことは同時にここでイエスの復活体の超越性を描くに役立っている。どんなこの世の障害もイエスが来るのを引き止めることはできない。イエスは彼を信じる者のところへ来る。」（伊吹）

「イエスが来て真ん中に立ち」。主イエスは 14 章 18 節で「わたしは、あなたかたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る」（同 28 節、16 章 16-22 節参照）と約束したが、それがここで実現する。

「あなたがたに平和があるように」（Εἰρήνη ὑμῖν、エイレーネー ヒュミン）、
【NKJV】 "Peace be with you."

「この言葉は 14:27 や 16:33 を思い起こさせる。二つとも世と関係して言われている。世にある怖れに対する平安であり、それは世が与えない平安である。すなわち世が平和と考えることと同じではない。まったく違うものである。それはおよそ世の平安が壊された時にこそ与えられるものであろう。その平安はイエスの復活、聖霊におけるその到来によるものである。……。すなわちこの平安はイエスの再来によるイエスとの出会いが与えるものである。これが新しい出発点となる。」（伊吹）

20 節。「そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。」

主イエスがお見せになった御自身の「手とわき腹」には、釘で打ち抜かれ、槍で刺された傷跡が生々しく残っていたであろう。そしてこれらの傷は復活の主イエスが十字架上で殺されたイエスであることの証拠にもなる（20:25参照）。

ヨハネは主イエスの「十字架の傷を前面に出している。それによってヨハネはここでただ一つのことを言おうとしている。それはイエスの愛である。イエスは自分の体を見せているのではなく、愛によって受けた傷口、すなわち愛がある限り永久に残っている傷口を見せている。イエスの愛のみがイエスを知ることの、イエスに会い、イエスを感知する可能性であり、イエスへのただ一つのアクセスなのである。

イエスは十字架上で自分の弟子たちへの愛によって受けた傷を第一に指し示すのであり、それは同時にイエスの愛の告白なのである。そして復活しすべての上に支配する主は、その権力と栄光ではなく愛のみをわれわれに示す。イエスは愛を示すために来る。それはイエスがわれわれのもとへ現在も、そして永久にわれわれを愛し、命をささげる方として来ることである。それがイエスのアイデンティティであり、もし復活者が十字架のイエスのこの面影を持っていなかったなら、われわれは天上の絶対者であるイエスと出会うことがない。」（伊吹）

「弟子たちは、主を見て喜んだ」。彼らの「喜びは、復活の、死が克服された喜びであり、愛を受ける出会いの喜びである。」、「別れの悲しみは再会の喜びに変わった」（伊吹）
「喜んだ」（χαίρω、カイロー）。この時の弟子たちの喜びは、主イエスが 16 章 22 節で、「ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない」と言われたことの成就である。

21 節. 「イエスは重ねて言われた。『あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。』」

弟子たちに再び平和があるようにと言われた主イエスは、直後に、弟子たちをこの世に向けて遣わす。ご自身が父なる神から遣わされたように(4:34、5:24、30、37-39、6:44、7:18、18、28、33、16:5 他多数)。「わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました。」(17:18)

「喜びと平安は世へ運ばれなければならない」(伊吹)

22 節. 「そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。』」

「息を吹きかける」。創世記2章7節「主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に息を吹き入れた。人はこうして生きる者となった。」

「ヘブライ語では息も霊を意味する。『吹き入れる(ἐμφυσάω、エムプサオー)』は新約聖書でここだけに一回しか用いられていないが、70人訳の創世記2:7と同じ動詞が使われている。訳としては『吹きかける』より『吹き入れた』の方がよいであろう。この個所は、人間の生命の呼吸としての霊、すなわちその呼吸する鼻に対して『息』と言われていて、その関係から『霊を吹き入れた』とは言われていない。

しかしこの『生命の息』とは神の霊が人間に生命を与える、活ける者とする同意義である。『わたしがお前たちの中に霊を吹き込むとお前たちは生きる』(エゼキエル37章9、14節)。また『神の霊がわたしを造り、全能者の息吹がわたしに命を与えた』(ヨブ記3:4)。……。

さてヨハネのテキストでは19:30「そして頭を垂れて霊を引き渡した」(1:33)ということがここに現前していると言えよう。イエスはここで賜物として地上のイエスの霊を与えたのではないか。この聖霊を受けるということは新しい人間として生まれるという(ヨハネ3:1以下)洗礼にも匹敵する(マタイ28:19参照)。『受ける』は14:17参照。この霊を受けることに基づいて派遣された者の言葉は霊の言葉となる。イエスの復活が霊の言葉として宣教者の言葉に入るのである(15:26以下)。こうしてヨハネ福音書では復活と聖霊降臨は同時に訪れる。」(伊吹)

23 節. 「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

マタイ16:19「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」

マタイ18:18「はっきり言うておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつながれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」

復活の主イエスにより、罪の赦しの全権が弟子たちに与えられる。ここで間違っ

はならないことは、聖霊に与えられた者にこの全権が委任されるということ。つまり、「罪を赦す真の主体は聖霊なのである。ただしその霊は『思いのままに吹く』のである(3:8)」(伊吹)

「罪」(ἁμαρτία、ハマルティア)は、ヨハネによる福音書では17回使用されている。(マタイ7回、マルコ6回、ルカ11回、ローマ書48回、ヘブライ25回、ヨハネの手紙一17回)。ヨハネ16章9節「罪については、彼らがわたしを信じないこと」。